

院生の指導について感じること

坪井美樹

人文社会科学研究科教授

はじめに

教育は百年の計のもとに語られるべきだろうと思う。性急な成果主義の横行する現代においてもなお。しかし、だからといって私自身に他人に語るべき明確な理想があるわけではなく、とりたてて大学院教育の「改善策」を持っているわけでもない。明日どう「改編（改変）」されるかもしれない大学院の組織の中で、日々の授業や学生指導に追われる身として、いっそ、私自身が守備範囲とする文芸・言語専攻日本語学領域における極く身近な日常の院生指導について感じることを書きたいと思う。

以下に述べることは大学院教育の現場に普遍的に通用する面もあるだろうが、私の専門領域である日本語学特有の問題もある。日本語学は、言語学の中の個別言語に関する学の一つである。院生には日本語を母語とする院生（日本人学生）と日本語を外国語とする院生（留学生）がおり、基盤とな

る日本語能力や研究・学習モチベーションが異なる。研究形態も研究室単位で共通の課題を追究するよりも、個々人が固有のテーマで研究を進める形が基本である。以上のことを踏まえて以下の私の話を聞いていただきたい。

モチベーションの自覚・維持・獲得

物事の移り変わりの激しい現代において、最低でも5年間の博士課程の学修期間は短い時間ではない。院生がこの短からぬ年月の間倦まず学習と研究に携わり続けるためには、やはり根本に自らの研究対象（私のところでは「日本語」）に愛情と興味を持ち、それについて研究することを楽しく思う気持ちが必要ではない。そうでなければ良い研究者にはなれない。私は、そう信じている。

大学院に入学してくる現今の学生たちが、そもそも何故に大学院を目指したか、

その動機もきっかけも多様である。日本人学生と留学生とは違うし、留学生でも出身国の違いによる差もある。日本人学生でも、最近では学類(学部)からそのまま上がってくる者は減り、一旦社会に出た後進路を変更して入ってくる者が増えている。現在私の日本語学領域には高校教師を定年退職した後入学してきた大学院生もいる。これらの院生の個々のモチベーション(学位を得たい、大学教員になりたい、という実利的・功利的なものや、場合によるとモラトリアムまで含んで)をそれはそれとして認めつつ、根底に「研究に遊ぶ」ことの楽しみを自覚させることが私の大学院教育の一つの目標となっている。入学後も院生自身に自らの学習・研究モチベーションの自覚・意識化を求め、自らのモチベーションと日々の学習・研究活動を意識的に結び付けさせるよう促す努力が必要に感じられる。

適切なカリキュラム

学問も芸事の伝承と似た面があって、教えられるより盗むほうが身につくということが確かにある。しかし、今は、先生がすぐれた研究をしてみせてさえいれば、院生は放っておいても自然と研究の方法を会得するだろう、というような非効率的な教授法の時代ではない。教える側にどうやったらうまく盗んでもらえるか工夫する必要がある。

ある。そのために大学院の授業カリキュラムにも工夫が必要である。

そもそも大学院入学時の院生の、専門領域に関する基礎的な知識や、研究に対するモチベーションに差が見られる現今では、院生の立場に立った大学院授業カリキュラムがもっと考えられなければならないだろう。一つの専攻・領域の中で、授業科目を専門的テーマ別に横並びに展開するのではなく、どの講義の後にどの講義を受講してもらって院生個々の力をレベルアップさせるか、という縦の授業科目の展開を図る必要も出てきている。

昨今の院生との個別指導で、大学院ではなく学類の授業の聴講を勧めることも多くなった。いわゆる畑違いの専門から日本語学の大学院に進んだ院生や、入学前十分な学習環境にいなかった留学生などでは、いきなり専門的で細かな議論の飛び交う大学院の授業の枠に一律に閉じ込めてしまうことが決して良い結果を生んでいないように思う。毎年度当初に院生個々と教員が面談し、本人の希望と教員のアドバイスで個別の学習メニューを作成するようなことが制度的に行われると良いと思う。

適切な授業運営

個々の授業においても、その授業でどんな知識・能力を身に付けてもらいたいのか教

員の方から積極的に明示し、院生に獲得目標を自覚してもらう必要が増えた。要するに大学院の授業でも学類の授業と同様の配慮が必要になってきた。

近年、人文系においても5年間で学位を取得して修了することが奨励されるようになって、それはそれで、具体的な目標を院生に与え、計画的な学習・研究計画を立てることを迫るといい結果を生んではいるが、一方、自分の学位論文テーマ以外の領域には興味を示さず、狭い範囲の学習・研究に閉じこもる悪しき傾向も生まれているように思える。私のところの専門で言えば、文法だの音韻だの、さらには文法の中でも、アスペクト研究だのモダリティ研究だのという細分化された言語研究の中で、生きた人間の活動としての言語というトータルな存在を見る目を失ってもらいたくない。授業は狭いタコツボ的見地から院生を救う良い機会でもある。学生に将来の研究者・教育者としての幅を持たせるためにも授業を利用して多様で多彩な視点・視野を提示したい。そのためには、教員自身がまず広い視野を持つ努力が必要であろうが。

個々の院生への研究指導

私の所属する「日本語学」の研究は、先に述べたように基本的に“個人営業”である。言語研究は研究者自身の「言語観」に

基づくところが大きく、その意味で「哲学」の一種であり、個人個人のものの見方・考え方が尊重される。したがって、研究テーマを見つけること自体がまず院生本人の自由に任されることとなるのだが、近年この「自由」を持って余す院生が増えてきたように思う。大学院進学モチベーションの多様化とも絡むのだが、入学時からやりたい研究テーマが確固としてあるなら良いが、割と安易に学類(学部)卒業論文で扱ったテーマをそのまま継続することにしただけであるようなケースが見られる。また、韓国のように教員と院生の関わりが日本よりも密で、院生の研究テーマも教員の指示によるのが普通である所からの留学生の場合、日本の大学院における「自由」にとまどい、何か見放されたような不安感を感じる場合もあるようだ。研究テーマの選択(あるいは途中変更)に関して気楽に教員と相談できる雰囲気を作る必要があると思う。そして、それと連動して、研究指導教員も入学時に教員側が指定した教員が固定されるのではなく、学生の問題意識の発展に応じて学生自身が指導体制を要望できるような、より柔軟な雰囲気作りが好ましいのではないかと思う。

生活基盤の安定

最低5年間という学修期間の間、院生が

安心して学習・研究に打ち込めるよう、経済面・健康面・安全面で平穏無事であってほしいと思う。しかし、こればかりは教育上の工夫でどうなるものでなく、相応の手助けや配慮はするものの、教員のできることに限界がある。一旦事故や障害が生じた場合も、教員よりもむしろ事務職員の方々、留学生センターや保健管理センターの方々などにお世話になることが多い。故国を離れて暮らす留学生の場合は特にそうである。

私の所属する日本語学領域でも、ここ2、3年の間に3人の留学生に問題が生じた。第一のケースは、中間評価論文の取り組みに躓いたのを契機に不登校状態になり、そのまま研究生活に復することができずに時間切れで退学に至ったケース。第二は、経済的に困窮し、休学して建て直しを図ったが、結局退学せざるを得なくなったもの。第三は交通事故に遭って負傷入院し、怪我自体はそれほど重傷ではなかったが、精神的ショックが尾を引き通常の生活に復するまでかなり時間がかかったケース。いずれも家族のような極く身近な存在が初期の段階から事態に関わることができ、我々大学側と連携して対処していたら、もっとマシな解決法があったかもしれないケースであった。経済的に不如意で精神的に孤立しやすい留学生を支える工夫がもっと考えられて良い。

修了後の進路の展望

大学院進学モチベーションが多様化したとは言え、修了後の進路希望として一番多いのが、研究者＝大学教員の道である。教える側としても、優れた素質を持った院生にはそれにふさわしい職についてもらいたいと願う。しかし、他の諸分野と同じく私の日本語学領域でも大学教員のポストに付くのは以前よりも難しくなっている。我々自身が定員削減があるたびに若手のためのポストを減らし続けている。大学院進学者の減少や院生の質の低下を嘆く一方で、優れた若い研究者が報われる道を用意できないでいることが残念である。

おわりに

教育は人を育てることであり、人が育つには時間のかかるものであるから、教育の成果もまた時間が経ってみなければわからない。にも関わらず成果が性急に求められると、教育組織や制度の改変それ自体が成果のように語られ出す。上に私が書いたことは、いわば愚痴のようなものであり、問題提起にさえなっていないが、恐らくどんな体制になっても直面する大学院教育の問題ではあるという正直な思いで書いてみた次第である。

(つばい よしき/日本語学)